山田くんのバレンタイン

小川　辺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
山田くんのバレンタイン

【Ｎコード】
Ｎ０２４６Ｖ

【作者名】
小川　辺

【あらすじ】
マッドサイエンティストな変態科学部部長と、それにつきあわされる僕――山田と、むさくるしいバレンタインデーのお話です。

ここは一人の部員しかいない科学部の本拠地である理科室。そこでは色鮮やかな薬品が試験管の中で妖しく輝いていた。部屋中に立ちこもる異臭はまともな嗅覚を持つものなら目眩を起こすだろう。

理科室は魔窟と化していた。しかしその中央ではここの支配者たるに相応しい魔王の笑みを浮かべながら手元にある茶色の物体を見つめる男が居る。

男の名は九条誠。この学校随一の天才だが、この光景を見ればただの紙一重である。

「ひゃーーーっははは!!　ついに!　ついに完成したぞ!」

九条誠は歓喜の雄叫びをあげた。

彼はこの休日を使いある薬品を作っていた。ちなみに理科室使用の許可は取っていない。

取る必要はなかったからだ。なぜなら彼にとっては自分が法律であり先生なんぞに許してもらう必要などなかったのだ。

今は一月も終わり二月が始まったばかり。外では未だに寒風が吹き荒れている。

そんな季節に誰もいない部屋の中、九条誠は叫んだ。

「これぞ略してモテ薬!　これさえあればバレンタインなど恐るるに足らず!」

そう彼はこれから訪れるバレンタインで『反乱』を起こす気でい

た。
何故なら彼には理由があった。
――今を遡ること数日前、場所は昼休みの屋上。
九条は彼の数少ない友人であり幼馴染でもある山田という生徒と食事をしていた。
話の内容は最初連休中に何をするかという至ってありきたりな内容だった。
しかに唐突に九条は立ち上がり天を仰いだのだ。
そして爽やかな微笑とともに宣言した。
「私はこの連休に四次元ポケットを開発しなければならないのだ！」
山田は九条の妄言には慣れていたので華麗に無視した。
だから四次元云々について何も言わなかった。言っても無駄であるから。
無視された九条は切ない顔で山田くんを見つめた。
「山田くん……そこは『何で？　しかも四次元ポケットかよ！？』みたいに突っ込んでくれると嬉しいのだが？」
山田はそんな九条に哀れみの視線を投げかけつつ、黙って手元のお弁当を食べた。今日の山田の弁当はノリ弁だった。
「……っく！　いいさ！　……聞いて驚け！」
誰も聞いてないのに九条は叫んだ。
山田は黙々と弁当を食べていてその大声にも何処吹く風だった。
しかし何故山田が寒い中でノリ弁なんかをつついているかという

と九条誠が五月蝿かったからだ。
早い話が教室から追い出された。山田はそれに巻き込まれた犠牲者だ。
さらに購買に行こうにも九条誠の名は既にブラックリストに載っている。
過去に購買部のパンに怪しげな薬品をいれて危うく集団食中毒を起こしそうになったからだ。
そんな九条に幼馴染である山田は仕方なく付き合っていた。ちなみにノリ弁は近くのお弁当屋さんで購入。
そんな山田の苦労は露知らず、九条は声高らかに宣言した。

「連休明け！　それはバレンタイン！」

――バレンタイン。
その言葉に山田は初めて興味を持ったように九条を見た。
山田のその様子に九条は気を良くし、続けて言った。

「この不肖、九条誠！　自慢じゃないが頭脳明晰、容姿端麗、運動神経五輪級――となればバレンタインで女子の皆さんにアタックされる事はこれ必然！」

山田は誠の名前が出てきた辺りから自分の弁当に再び集中し出したので全く聞いていなかった。
しかしそんなことはお構いなしに九条は話を続ける。

「そんな私に大勢の女の子はチョコレートをプレゼントすることだろう！　ちなみにチョコは嫌いじゃない！」

山田は「あ、飲み物切れちゃった」と言い残して既にその場にいなかった。

寒空の下、屋上には九条誠はたった一人となった。

「そこで四次元ポケットがあれば幾らチョコを貰っても問題ない！　時間は掛かるかもしれないが、何！　この私にやって出来ないことなどない！」

九条は自分の世界に入ってしまったため一人冬の屋上で延々と語った。

――十分後。

「そこでだ。山田くん！　君に協力を――」

言いかけて脇に座っているはずの山田に視線を向けた九条は、そこで山田がいないことを初めて知った。

「や、山田くん！？　ど、どこ行ったぁぁああ！？」

以上、回想終了。

そして現在、四次元ポケット――は諦め、急遽モテ薬を作った九条の目的はただ一つ。

このモテ薬を使って女の子達からのチョコを独占し、話を最後まで聞かずに放置していった山田くんを見返すためだ。

なおこの任務を遂行する為に九条はある作戦を考えていた。

それが成功すればこの学校は紛争地帯の様に荒れる。最悪退学ものだろう。

そこまで考えていてなお、九条は笑みを絶やさない。

「山田くん……後悔するなよ？」

このモテ薬を使えば全校生徒の持つチョコの全てを手に入れられる。
そして山田くんに山積みされたチョコを見せつけ、自らの愚かさを悟らせるのだ。
ああ、九条様。愚かな私を許してください……
「ふふ……ひゃーーーっはっはっは！」
奇声を発しながらも彼は自覚していなかった。
――自分が全くモテないことを。
一方その頃校庭では連休中でも部活動に勤しんでいる二人の女子生徒がいた。
二人は理科室の壁を突き抜け来る九条の笑い声を聞いた。
「……ねぇ、あれってもしかしなくても九条誠？」
「もしかしなくてもあいつしかいないよ」
「なに……やってるんだろうね？」
「大方、またろくでもないこと企んでいるんでしょ」
二人は再び校庭を駆け出した。後三本はトラックを走り込まなければならないのだ。
そして理科室から九条誠の奇声が聞こえなくなったところで、一人が走りながら隣にいる女の子に話しかけた。
「……そういえばさ、そろそろバレンタインだよね？」
「そうだね」
一人が気のない返事をする。あまり興味がないようだ。

「ミキは誰かにあげるの？」

ミキと呼ばれた生徒は「どうだろ？」と言い、少し考えるそぶりを見せた後「……少なくとも九条誠じゃないね」と言った。

二人は互いに笑った。

そんなこと九条誠には知る由もなかった。

◇幕開け

朝、学校へ来ると異常な空間が発生していた。

僕は一応、今日がバレンタインであることは知っていた。

だとしてもこれはないだろう？

男子生徒達は獣の目をしていた。

獲物（チョコ）が欲しいのだろう、もしかすると愛に飢えているのかもしれない。

女子生徒は狩人の目をしていた。

獣を餌（チョコ）で嵌め、狩り取るのだろう。中には複数の獣を狩りとってしまう達人もいるかもしれない。

教師達はハイエナの目をしていた。

校則という罠を使い、違反物（チョコ）を没収と言う名分で処分するつもりだ。

行き先は胃袋、免罪符は「痛みそうだったから、勿体無くて仕方なく食べた」

……まさに弱肉強食、食うか食われるかだ。

余りの殺気にうっすらと冷や汗が流れる。

「……帰ろっかな」

こんな所にいたら僕まで食われそうだ。

「やあやあ、山田くんではないかね？」

わざとらしい台詞は聞きなれた幼馴染の九条誠の声だった。

いつも思うのだが、こいつは普通に会話することが出来ないのだろうか？

昔はもう少しましな性格だった気がする。……いや、そうでもないか。

「ところで誠。チョコは貰えたの？」

僕は誠が連休前に何か言っていたのを思い出した。確か……チョコを貰うだのなんだの。

「ふっ、愚問だな！」

……可哀相に、これで貰えなかったら惨めだろうな。

こいつが明言しない時は大抵何か失敗した時だ。つまりまだ貰っていないのだろう。

「それはそうと、山田くん！」

「なに？」

「今日は祭りだ！」

当たり前だがバレンタインにお祭りと言う雰囲気は全くない。せいぜいささやかなイベントというのが僕の認識だ。

しかもこの状況を見れば戦場か狩場というイメージが脳裏に浮かぶ。

……もう少し穏やかにならないのかな。

しかしまぁ、誠のことだ。またろくでもないことに決まっている。
僕は「頑張ってね」と社交辞令を述べた後、教室へと向かった。

◇

教室の中は外見上至って平和だった。
中央では一人の男子生徒がはしゃいでいた。
もうチョコを貰ったらしい。周りの男子生徒達の瞳の中には嫉妬の炎が垣間見える。
ここまで来ると告白よりチョコを貰うことの方を重視しているように見える。
本来の意図を忘れてやしないか？
貰えれば誰でもいいのか？
そんなんだから貰えないんだよ。と仄かな反感を懐きつつ、僕も貰える立場じゃなかったのを思い出してそれ以上は考えないことにした。
授業が始まってもどこか上の空な生徒が目立った。
そして昼休み――それは突然起きた。
学校内全てに放送の始まる合図が流れた。
何人かの生徒達は何事かとスピーカーに注目する。他の人達は無関心な様子で思い思い過ごしていた。
いつの間にか誠はいなくなっていたので僕はコーヒー牛乳を片手に耳を傾けた。

「えー、同志諸君！　今日は何の日か知っていますか？」
「ぶっ！？」

思わずコーヒー牛乳を噴出しそうになるのを咄嗟に我慢し、僕はスピーカーを睨みつけた。
……この声は誠だ。

「そう、バレンタインです。モテない男子諸君が改めてモテないのを肌で感じ取ってもらう為のイベントです」

いや、それ違うでしょ？

「しかし！　我々はこの不条理に反逆する！」

……唐突だ。

今朝の『祭り』とはこの事か。

僕は頭を抱えたくなるのを我慢し、必死に冷静になろうとした。

……しかし誠のことだ。これは始まりに過ぎないだろう。

するとドタバタと人の倒れる音がした。

突然クラスの男子生徒達が腹を抱えて呻きだしたのだ。

「立てよ男子！　今こそモテないというレッテルを返上する時！！」

その言葉を合図にクラスの男子が雄叫びをあげた。そして次々と四つん這いになり地面を駆け回る。

……とても正気の沙汰とは思えない。

目は血走り獰猛な野犬を連想させる。

何か誠にヤバイ薬でも打たれたのかもしれない。

悲鳴がこのクラスだけでなく学校全体から聞こえた。

「ぎゃぁぁぁぁああ！　私の本命チョコぉぉぉおおお！」

あちこちで女子生徒達の悲痛の嘆きが聞こえる。

まるでテロが起こったような騒ぎだ。……いや、これも十分にテロか。

獣と化した男子生徒達は無断で鞄を漁りチョコを強奪していく。

勇敢にも立ち向かおうとした女子生徒はその余りに血走った瞳に腰を抜かしてしまった。
……これって犯罪だよね？
女子生徒達の必死の抵抗も空しく、獣となった男子生徒達は大量のチョコを抱えながら猿の様に飛び回って廊下へと逃走して行った。
その後を女子生徒達はまさしく鬼の形相で追いかけていく。
あの様子だと捕まったら命の保障は出来ないだろう。
リアル鬼ごっこだ。
――しかし、
「モテないからチョコを奪うって……最低では？」
誠はどこかで間違えたらしい、人の道を。
「山田さん！　あいつら捕まえるの手伝って！」
女子生徒の一人が僕に助けを呼んだ。
「うん。でも、その前に……親玉を潰さないと」
そう言い残して僕は誠のところに向かった。
全てを終わらす為に……
◇
「ふふふ……ひゃーーーーっはっははは！！」
放送室のマイクの前で演説を終えた九条は高笑いをあげていた。
「これで全女子学生の持ち込んだチョコは、全て私のものになる！」

九条が作った”モテ薬”の本来の名称は『モテない男を支配する薬』。
最初と最後を取って”モテ薬”と九条は紛らわしく呼んでいた。
「モテ薬……効果は絶大だな。モテない男達は自らの欲望に忠実になり獲物（チョコ）を奪う、そしてその状態にさえなってしまえば”親”である私の思うがまま……くっくっく、ここ数日かけてモテなさそうな連中にモテ薬を与えた甲斐があったと言うものだ！」
すでにこの放送室は野獣となった男子生徒達で固めてある。
欲望のままに突き進む彼ら野獣の運動能力は通常の男子生徒の三倍！
これでは何人たりとも私に危害を加えることは出来まい？
先ほども男子教員達がやって来たが呆気なく倒し、今ではモテ薬で私の部下だ。
モテる男子生徒もモテ薬感染者に噛まれたら感染するしな。
そんなわけで今この学校内で正気を保っていられるのは、私とモテ薬の影響を受けない女子生徒のみ！
獣達は次々とチョコを運んでくる。すでに私の後ろには戦利品のチョコが山のように積まれていた。
「後は山分けした後全員で共犯関係と言い張り、連帯責任という名の無罪放免……くっ！　完っ璧だ！」
それにいざとなれば私の言いなりとなる部下達に罪をかぶせればいいだけだしな。
しかし物事をやり遂げると人間とは不思議なもので更に欲が出てくる。

「……いっそこのまま女子生徒全員を私の下僕に――」

ドゴーン！！

トラックが突っ込んできたかの様な衝撃音が襲った。

感覚まで鋭敏になった野獣達が咄嗟のことに身構える。

「なっ、何事だ！？」

後ろを振り返ると爆薬でも使ったのか煙が出ていた。

馬鹿な！　あいつらはどうした！？　扉の前で待機していたはずだぞ！

「ま……まさかっ……」

脳裏にある一人の横顔が思い浮かんだ。

◇

煙幕が上がった。

灰色の煙の向こう側では野獣と化した生徒達の呻き声と誠の驚く声が聞こえる。

「……意外と手こずった」

あの後、僕は生徒会執行部から発煙筒（防災訓練用）と剣道部から竹刀を拝借した。

どちらもチョコなんて関係ない場所だったので野獣化した生徒はいなかった。なので簡単に取りに行く事が出来た。

その後、職員室で事件の大体の現状を伝えた。

当初は学級崩壊！？　と焦っていた先生方だったが「誠」の名前

を出した途端安堵の溜息をついた。
……誠って変な信用があるんだなぁ。
そして誠の鎮圧の許可を貰った僕は三階にある放送室へと向かった。
以上、これまでの僕でした。
「馬鹿な！　どうやってあいつらを倒したと――」
その言葉が終わらぬ内にドンッと鈍い音が木霊した。
誠が言い終わらないうちに僕は疾駆し、誠の横にいる野獣のみぞを竹刀で突く。
勢いと体重を乗せた一撃で急所を突かれた野獣は呻きながら倒れた。
……死んでいないことを祈ろう。
「容赦しなければ『こんなもの』どうって事ないよ、誠」
単純な運動能力なら上がっているが本来の体の耐久性はそのままだったし、何より動きが単調で読みやすいから僕の敵じゃない。
「そんな……私が、負ける？」
誠は呆然としている。
「さぁ、チョコ返しに行こう？　一緒に謝ってあげるから……」
一歩一歩、僕は誠に近づいた。
誠は俯いたままだ。
唇を噛んで悔しげな顔をしている。
……そこまで悔しがらなくても。

僕がそっとその肩に触れようとした瞬間――

「――今だ、大山！！」

誠が声を上げた。

物陰に隠れていたのか体育教師三十八歳独身、何故か科学部顧問（誠に秘密を握られ、脅されている）の大山篤先生が掴みかかってきた。

僕は咄嗟に誠を楯にして難を逃れた。

誠は大山先生に抱かれる形になったがそこは味方同士、大山先生は直ぐに体勢を整え誠は先生の後ろに隠れた。

「ふははっ、見たか！　私はまだ負けてはいない！」

まるで子供だ。酷く諦めが悪い。

しかしどうやら大山先生は向こうの切り札のようだ。誠は勝利の笑みを浮かべている。

「大山は趣味が体力作りと筋トレという筋金入りのマッチョマンだ。おまけに付き合ってる女性がいないためモテ薬と脅威の適合力を見せた私の最高傑作！　負ける道理がない！」

まるで人を物のように言う誠。

そんな誠に幼馴染としての僕は落胆と悲しみが募った。

「さぁ！　行け！」

まるで犬か何かに言うかのように誠は大山先生をけし掛けてくる。

「誠！　もう止めるんだ！」

大山先生の攻撃を受け流し距離を取る。
頑固な誠の性格をよく知っている僕は無駄とは解りながらも叫んだ。

「誠！　どうしてこんなことするんだ！？」
「はっ、何を……今更戻れるわけないだろう？」

一人の人として……なにより誠の幼馴染として僕は誠のその態度に腹が立った。

「誠！　たくさんの人に迷惑掛けて！」
「お前は私の母親か！？」

そう言いながらも僕は大山先生の攻撃をかわしていく。
動きは大振りなのにこの速さは異常だ。
今までのろくに鍛えていない男子生徒達とは格が違った。

「くそっ！」

大山先生の後頭部を打ったが全く怯まない。しかしこれ以上強力な攻撃は大山先生が危険だ。
一縷の望みを込めて誠を見たが止める気はなさそうだ。
なら一か八か――

「「「山田先輩！　がんばって！」」」

その時、声援が聞こえた。
僕は大山先生を突き飛ばして間合いを取る。
ちらりと後ろを振り向いたそこにはたくさんの女子生徒達が集ま

っていた。
教室で僕に声をかけた生徒もそこに居た。……どうやら下の階は全て鎮圧したようだ。
なら残るは此処だけだ！
「山田くん、もう諦めたまえ。ここで君が『参った』と言えば私も降参しないこともないよ？　勝負に負けて試合に勝てばいい。……私はその逆を貰うけど」
誠は状況が劣勢であることを悟ったらしい。
しかしどこまでも負けず嫌いな奴だ。
「……冗談。勝てる勝負なのにどうして『参った』って言わなきゃいけない？」
もう勝負は決まっている。これ以上の戦いは確かに無駄かもしれない。
それなのに僕が頑張る理由は――誠の馬鹿を叩き直すためだ！
僕は意識を集中した。
深く……深く呼吸をする。
大山先生は本能が何かを察したのかじりじりと後退していく。
場が静かになっていく。
「おい！　大山！　どうした！？」
唯一、空気の読めない誠だけが声を出していた。
僕は一本芯が通ったかの様に重心を下に降ろした。
場が静寂に呑まれた。
刹那、降ろした体重をバネにし、全てを前へ前へと押し出す。
大山先生は一瞬反応が遅れたが、カウンター狙いで大きく腕を振りかぶっている。

間合いに入った。
大山先生が僕の顔面に拳を突き出す。
僕も竹刀を突き出す。
ボキッ
――鈍い音が聞こえた。
僕の目の前に大きな拳があった。
僕の竹刀は先生の右肩を抉っていた。
……これでしばらく右腕は使えなくなるだろう。
心の中で先生に詫びる。
……しばらく体育の授業は自習だな。
止めとばかりに僕は竹刀の柄を大山先生の腹に叩き込んだ。
そして先生は沈黙した。

「「っわぁぁあああああ！！」」

それを見ていた生徒達が歓声を上げる。
そこには正気に戻った男子生徒達もいた。

◇閉幕

「……誠はよくやったよ。でもやり過ぎたね」

僕は誠の肩にポンと手を乗せた。
ここは体育館。今は全校生徒が集まっている。何故ならここで最後の後始末をする為だ。
誠は囚人よろしくという感じに拘束されていた。手錠を嵌められ椅子に拘束され、ガムテープで口を塞がれている姿は哀れと思ったが、どこか滑稽でもあった。
一歩、僕は誠に近づく。
他の生徒達はこれから起こるであろう断罪に、恐怖と期待を寄せ

ていた。
さらに一歩、僕は近づいた。
誠の顔が近くに見えた。
そして僕は――
誠の拘束を解いた。
「や、山田くん？」
誠は何故僕が拘束具を外したかわからないようだ。
……この馬鹿。
「誠、これ」
そして僕は予め用意していた『アレ』を誠に渡した。
「こ、これはもしや！」
誠の顔が驚愕に染まる。
「誠は変態だから結局貰えなかっただろう？　僕には解っていたよ」
「チョ、チョッコレぇぇぇトぅぅぉぉぉぉぉぉ！！？」
誠が歓喜なのか驚愕なのかよくわからない奇声を上げた。
そして、一瞬の静寂。
その後には、恥もプライドも捨てて何故か男泣きをする一人の馬鹿がいた。
「「な、何だとぉぉぉぉぉぉぉ！！？」」
誠の絶叫後、その声に反応して男子生徒の殺気が瞬時に体育館内

に感染した。

「馬鹿な！　あの女子剣道部期待の新星、『美少女』剣士の山田愛華さんが！？」

「それも我が校最大の汚点である変態科学部部長に！？」

「あ、あの『僕っ娘』のアイカたんが！？」

「愛華さん！　お気は確かですか！？」

「おい、救急車を呼べ！　今すぐ！！　警察もだっ！！」

馬鹿男子生徒ズ＆僕のファンらしい女子生徒達の驚きの声が体育館内にこだまする。

一部変なのがいたがどうでもいいや。

……でも、『たん』って何？

「や、山田くん……」

誠はまだ事実を受け入れられないのか戸惑っているようだ。

僕は誠の瞳をじっと見つめた。

「……あいかって呼んで？」

ここで僕は可愛らしさをアピール。

わざと弱々しい声を出し相手の庇護欲をそそる。

「「「キャァァァアアアアア！！」」」

体育館に男女問わず熱気が溢れた。

悲鳴、歓声、雄叫び、ありとあらゆる叫び声が飛び交う。

それは地響きの様にビリビリと僕の肌を震わした。

「あ、愛華くぅぅぅぅうううううんぅ！！」

僕の予想通り誠は喰いついてきた。

しかし念の為、ここでもう一つ可愛らしさをアピールするのもいいかもしれない。

「……ま、まことぉ」

僕はモジモジと手をすり合わせ上目遣いに誠を見た。

「あ、愛華くん？　どうしたんだい？」

初めて見る僕の女の子らしさに誠は戸惑っているようだ。

「……誠のことずっと好きでした。……馬鹿なところも、ちょっぴり変態なところも全部！」

ちょっとばかしツンデレ風味なこの仕草。

結構練習したなぁ……鏡の前で。

――その直後

「「こ、この裏切り者がぁぁぁあああああ！！」」

言うが早いか、誠の姿は筋肉質な男達の群れの中に消えた。男達は怒りのせいか血の涙を流していた。

誠はまるで渦潮に飲み込まれた板切れのようにボロボロになっていった。

その様子を見て僕はほくそ笑む。

「ぐはっっ！？　あ、愛華くん！　た、助けてくれ！」
大変！　誠が助けを呼んでいる！　助けなくちゃ！
……なーんてね。
そんなの僕のキャラじゃないよ。
「や、山田くん？」
僕は慈愛に満ちた笑みを浮かべ――
「山田って言うなぁあああああ！！」
肉塊と化した男達の筋肉の中、誠の断末魔が聞こえた。
……やはり持ち上げてから落としたほうが絶望も深いらしい。
「……これで良かったんですね？　先輩方」
「はい。これで私達のチョコに懸けた想い――その仇を果たせました」

今年でお別れになってしまう三年生の先輩達。今日が相手に思いを伝えるチャンスだったのだ。
それを何処かの馬鹿がぶち壊したものだから、心中では怒りの業火で煉獄の世界が形成されていることだろう。
しかし卒業して離れ離れになったとしても、会おうと思えば会えるはずだ。
今日はバレンタイン。男子も女子も関係なく今日に懸ける想いがある。
自称正義の味方である僕には、その悪（誠）を滅ぼす”趣味”がある。

「ですが……」
「なんですか？　先輩」
ぼろ雑巾の様になっていく誠を見て僕は思わず笑みを浮かべる。
いい気味だ。

「さっきの告白、あれは……貴女の本心なんじゃないですか？」
その言葉に僕は耳まで真っ赤になる。
……僕もまだまだだなぁ。

「くそっ！　このチョコだけは死んでも死守してやるぅううう！！」
「「この裏切り者ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」」

（後書き）

かなり昔に書いた処女作です。
拙い文章ですがいまさら下手な修正をするのもなんでしたので、あまり推敲はできてません。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0246v/

山田くんのバレンタイン

2011年10月9日11時01分発行